

永田家とその蔵

永田家は、江戸時代（1603-1867）に高山の商人であり、酒造業者であった。当時は武士にしか苗字を名乗ることが許されていなかったため、永田家は「大阪屋」という屋号で呼ばれていた。

1854年、東京湾の品川砲台（現在のお台場）建設のために多額の寄付をしたことが認められ、徳川幕府から「永田」姓を名乗ることを許された。

1868年の幕府崩壊後、明治政府は藩政を廃止し、日本を都道府県と市町村に再編した。永田家が政界に進出したのは、1889年、永田吉右衛門正俊（1848-1901）が初代高山町長に就任したときだ。その5年後には帝国議会の衆議院議員に当選した。正俊は、銀行業、絹織物業、木材業をはじめとする多くの地場産業への一族の関与を主導した。正俊の息子の永田吉右衛門尚次（1873-1918）はその跡を継いで1904年に高山市長に就任し、1917年には衆議院議員に当選した。一族は非常に裕福となり、1932年には高山のどの家よりも多くの税金を納めたという記録が残っているほどである。

永田家の裕福さは、所有していた6つの蔵からも窺い知れる。日本では20世紀半ばまで大火が頻発していたが、1875年には高山で大火が発生し、1300軒以上の家が焼失した。永田家の最初の蔵は、その半年後に建てられた。1914年には、家の周りにさらに5つの厚壁の蔵が建てられた。これらの蔵は、万一の火災の際に家全体を守る防火壁となった。

永田家の蔵のうち、一番大きなものは酒蔵として使われていた。他の蔵には、米、商売関連の書類、衣類、家具が保管されていた。酒蔵の隣にある小さな建物は麴米（酒造りのために麴菌を接種した米）を保管するために使用されていた。1953年には、永田家の建物や蔵を再利用して博物館が作られ、後に高山まちの博物館となった。